

2018年11月15日

多和田葉子さん『献灯使』の英語版 全米図書賞を受賞

今年で第69回を迎えるアメリカで最も権威のある文学賞である全米図書賞が11月14日（現地時間）に発表され、本年度から設立された翻訳文学部門を、多和田葉子さんの『献灯使』の英語版 “The Emissary” が受賞しました。

フィクションのみを対象とした翻訳部門は1967～1983年に存在し、1982年に樋口一葉さんの『たけくらべ』と、リービ英雄さんが翻訳した『万葉集』が受賞しているため、今回の多和田さんの受賞は、日本の文学作品として36年ぶりの受賞となります。今年、設立された翻訳文学部門は、フィクションだけでなくノンフィクションも対象に加え、フィクション、ノンフィクション、児童文学、詩歌に続く5つ目の部門として始まりました。

翻訳文学部門の最終候補5作品には、多和田さんの『献灯使』のほか、イランの Négar Djavadi さんの “Disoriental”、ジュンパ・ラヒリさんが翻訳したイタリアの Domenico Starnone さんの “Trick”、ブッカー国際賞を受賞したポーランドのオルガ・トカルチュクさんの『逃亡派』、ノルウェーの Hanne Ørstavik さんの “Love” が選出されていました。

日本で2014年10月に講談社から刊行した多和田さんの『献灯使』は、大災厄に見舞われた後、外来語も自動車もインターネットも無くなった鎖国状態の日本を舞台に、死ねない身体を授かった老人世代の義郎の元から、体が弱くて美しい曾孫の無名が「献灯使」として海外へ旅立つ運命となる、ディストピア文学の傑作です。

多和田さんは今年4月に『地球にちりばめられて』という作品を講談社から刊行しました。その続編にあたる長編小説が、12月7日（金）発売の「群像」2019年1月号から連載開始予定です。

全米図書賞の発表当日、ちょうど日本に滞在なさっていた多和田さんから、受賞のコメントをいただきましたので、次ページでご紹介いたします。

講談社

【多和田さんのコメント】

「全米図書賞の翻訳部門第1回の受賞ということで、とても光栄に思っています。『献灯使』の英語版である”The Emissary”を刊行してくれた出版社 New Directions との付き合いは長いのですが、ベストセラーを目指すというよりは、ヨーロッパやアジアの上質な文学の翻訳作品を地道に出している小さな出版社なので、この出版社のためにも受賞は嬉しいです。また、『献灯使』を含めて、これまで何冊も私の本を翻訳して下さったマーガレット満谷さんへの感謝の気持ちでいっぱいです。」

多和田葉子（たわだ・ようこ）

小説家、詩人。1960年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。ハンブルク大学大学院修士課程修了。文学博士（チューリッヒ大学）。1982年よりドイツに在住し、日本語とドイツ語で作品を手がける。1991年『かかとを失くして』で群像新人文学賞、1993年『犬婿入り』で芥川賞、2000年『ヒナギクのお茶の場合』で泉鏡花文学賞、2002年『球形時間』でBunkamura ドゥマゴ文学賞、『容疑者の夜行列車』で谷崎潤一郎賞、伊藤整文学賞、2005年ゲーテ・メダル、2009年坪内逍遙大賞、2011年『尼僧とキューピッドの弓』で紫式部文学賞、『雪の練習生』で野間文芸賞、2013年『雲をつかむ話』で読売文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞など受賞多数。2016年にドイツのクライスト賞を日本人で初めて受賞。著書に『ゴットハルト鉄道』『飛魂』『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』『旅をする裸の眼』『ボルドーの義兄』『献灯使』『百年の散歩』『地球にちりばめられて』などがある。

『献灯使』（講談社文庫）の書誌情報

<http://bookclub.kodansha.co.jp/product?item=0000212699>